

初めて

井野光憲

僕たちは、初めてを重ねながら生きています。

暗闇の中から初めて光の中に立ち、全てのものに形があることを知り、それらに命があること、僕たちもまたその命の連環の中にあることを知ったのは遠い昔のことだ。以来、初めてを重ねながら生き続けている。

僕たちは、初めてを重ねながら生きています。

しかし初めてを時々、忘れてしまったり、突然思い出したりする。初めて空気を吸った日、初めて母に会った日、初めて父に会った日。だけどその時には、彼らが誰であるかは知らなかった。いくつかの初めてを重ねる中で彼らが、僕の、父であり、母であることを知った。その時僕は、初めて彼らの子供であることを認知した。初めて言葉を喋った日、初めてハイハイをした日、初めて二本足で立った日、初めて友達という仲間ができた日、

初めて自転車に乗れた日、初めて学校に入学した日、初めて泳ぐことができた日、初めて恋をした日。

僕たちは、初めてを重ねながら生きています。

初めては時々、感動をもたらしたり、共感をもたらしたりする。初めてのオードリー・ヘップバーン、初めての庄司薫、初めての開高健、初めての谷川俊太郎、初めての村上春樹、初めてのモーツァルト、初めてのビリー・ホリデイ。初めてのクラリネット五重奏。初めてから生まれる永遠もある。

僕たちは、初めてを重ねながら生きています。

初めてを時々、怖がったり、前にして^{おの}のびたりする。初めては何度も、何度も姿を変えてやってきたりする。初めて職場に出勤した日、初めて仕事で失敗した日、初めて海外に行った日、初めて結婚を決意した日、初めて

親になった日。その時、初めて自分以外の命を手にした。自分に委ねられている自分以外の命があることを、初めて知った。始まりは喜びであったが、それは重圧であり、責任であり、義務であることだと感じた。しかしそれらは間違いで、正しくは愛であることを、初めて知った。初めて子供を抱いた日、初めて子供のために食事を作った日、初めて子供の病気を知った日、初めて子供と旅した日、初めて子供を叱った日、学業のため初めて子供と離れて暮らすことになった日。

僕たちは、初めてを重ねながら生きている。

しかしヒトは忘れ去ることを生業にする生き物であることに、初めて気づく。それゆえに忘れ去っている初めの中にはない。だから僕は、どの初めてを忘れ去っているのかを知らない。だけど時々、忘れ去っていた初めてを不意に思い出したりする。初めてハンバーガーを口にした日、初めてコーヒーを飲んだ日、初めて給料が銀行に振り込まれたことを確認した日、初めて辞表を提出し会社を辞めた日、酒の飲み方について初めて父から嗜められた日、初めて妻と喧嘩をした日。初めて友の訃報を手にした日。

忘れ去っていい初めて、忘れてはならない初めてがあ

る。忘れてはならない初めては、僕に忘れられることを望んでおり、忘れた僕を見て密かにほくそ笑んでいる誰かが仕組んだ初めてだ。それらはほとんどの場合、僕に良い影響を与えなかった初めてだ。

遠い異国の地で戦争が始まった。初めて兵役に就いた日、初めて兵器で他人を標的にした日、初めて爆撃の振動を感じた日、さっきまで生きていた人が戦争で殺されるのを初めて見た日、戦争で壊れた街をテレビではなく初めて実際に見た日、多くの人が遠くの安全な街へ逃れる行列を初めて見た日。それらは全て誰かによって仕組まれたことだ。その誰かについては決して忘れてはならない。その人が仕組んだ初めてとともに。

僕たちの国にも、昔、同じことがあった。大人たちが仕組んだ戦争で、数多くの子供たちが死んだ。それらは初めてではなかったかも知れないけれど、決して忘れてはならない。仕組まれた初めてを二度と生み出さないために。

僕たちは、初めてを重ねながら生きている。

初めてはいいつも怖い。初めてはいきなりやってきたりする。初めては一度きりだったりもする。初めては勇気が必要としたり、挫折そうになったりもする。お酒を呑んで初めて吐いた日、初めて禁煙に挑戦した日、初めて

長時間の手術に臨んだ日、長時間の手術の麻酔から初めて目覚めた日、初めてマラソンを完走した日、初めて父を亡くした日、初めて母を亡くした日、初めて定年退職をした日、もう若くないと初めて感じ、そして初めて老いを感じ、更なる老いを初めて予感した日。

やがて、初めてを重ねて生きてきた僕たちは、初めて「初めて」にさようならをする日に出会う。その日以後、僕たちは初めてに出会うことはない。

だけど僕たちは、初めてに出会うことを諦めない。明日はいつも初めてだから、老いても明日、初めてのまだ知らない新しい僕たちに出会うために。